

第1部 研究の目的と概要

研究代表者：田口洋美

1 研究の目的

東北文化研究センター（以下、東文研と略す）は大学建学の理念に則り、地域再生の学として「東北学」を提唱し教育研究機関として学術的展開を図ってきた。その実践的研究として本研究は位置づく。

少子高齢化及び人口減少の継続的な進行や、高度経済成長及びバブル経済崩壊以降の産業構造の変動といった時代的現象下において、東北地方に点在する農山漁村集落は疲弊し、都市周辺地域では急速な過疎、廃村化に伴い集落の機能不全による実質的解体と再編という問題に直面している。とりわけ東日本大震災の被災地域の多くでは、これまでの集中復興期間において集落移転や地域コミュニティの分散が開始・進行しており、地域住民を主体とした合意可能な集落形成のための理念構築と提示が極めて喫緊の課題となっている。これらの複雑で重層的問題と向き合うためには地域住民の歴史社会的コンテクストに根差した、集落（集住的居住）を束ねるための価値の再評価と、次代の地域社会を担う若者の存在が不可欠であろう。

これまで東文研では、過去2期10年間にわたり、オープン・リサーチ・センター整備事業「東アジアのなかの日本文化に関する総合的な研究」と「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究」を実施してきた。これらのプロジェクトでは、日本文化の東アジア地域における地位を追求し、後者では日本国内の環境・生業・技術という具体的視点から環境への文化的適応プロセスとしての歴史動態の把握に努めた。

本研究プロジェクトは、これらの成果を踏まえ集住、集落、人が集い暮らすことの意味と機能をより鮮明に捉え、現在進行している少子高齢化社会と経済のグローバル化時代における新たな共同体、コミュニティ創出の理念構築を目指している。ここでいう理念とは、人々が合意可能な了解できる集住、集落形成の意味付けに他ならない。集落あるいは地域の基盤生業であった農林水産業や「家」制度（家の相続形態）の衰退、断絶、寺社統合の進行などが顕在化し、従来の地方集落やより広域的な地域社会で人々を結束させてきた地縁、血縁といった核的な関係性に大きな変化が生じているなか、その作業は人文社会系科学におけるきわめて現代的かつ実践的課題となっている。

研究では、主体となる考古、歴史、民俗・人類、環境デザインの各班が共通理解可能な資料の提示と相互連関が求められる。相互連関のキーは〈集住、居住、集落〉という「場所性」である。当然、そこには生き方（生活生業のあり方、生業の立て方）との関係が現れるわけであり、流動化する社会の構造的変容や精神を含む技術構成も関わってくることになる。つまり極めて複雑な関係の総体としての集住、居住、集落ということになる。また、このような複雑で多様な総体をいかに具体的な資料化へと導くかという問題も生じてくるが、これは本学が芸術系大学であるメリットを活かし、ビジュアルな資料作りを心掛けている。さらに東日本大震災被災地域の復興・再生に向けた指針を発信するとともに、地域再生の担い手（地域の相続者）を育成し、過疎・廃村化時代を乗り越える新たな地域社会像の提案を図る。即ち「撤退の時代」と称される縮小社会化の負の動きを「再生のシナリオ」として受け止め、新たな地域再生の礎となる基点を集住空間と若年層に置く試みである。これは同時に東北文化研究の発展に不可欠な若手研究者の育

成を行うことでポスト過疎時代の「若者たちの東北」のモデル化と理念構築を目指す。

2 研究の概要

(1) 研究体制

本研究は、考古学、歴史学、民俗・人類学、環境史といった人文社会系科学と工学系環境デザインを融合させた複合領域研究である。東北の歴史・文化に焦点を当てた地域研究であると同時に、環境変動のなかで地域、集落の動態を読み解く社会文化環境学の研究事例としても位置づく。

研究のコアメンバーとして、考古学では縄文社会研究、環境考古学、民族考古学、北方考古学などを、歴史学では日本古代・中世の東北地域史、近世・近代における東北地方を中心とした災害史や自然資源の利用・開発管理史、集落史（歴史地理学）を、民俗・人類学では文化人類学、社会人類学、生態人類学、経済人類学、民俗学（漁業、狩猟、農耕などの生業研究と精神世界を扱う信仰研究、集落の機能構造研究）を、さらに環境デザインや法学・制度史などを専攻している学内外の研究者たちの参画も求めてきた。

また、プロジェクト2年目はRAとして、3年目よりPDとしてプロジェクトに参画した佐藤未希は洋画領域を専門とし、視覚的資料制作その他の研究活動に従事している。同じく洋画領域を専門とする大学院生若干名からも適宜、調査への参加や視覚的資料制作などの協力を得ている。社会人大学院生である守谷英一には研究協力者として調査その他での協力を得ている。本学大学院出身の井筒桃子が絵はがき・古写真アーカイブス関連作業の中心的な担い手となっている。その他にも学内外の複数名の研究協力者、大学院生から本研究での諸活動に際して協力を得ている。なお考古班による環境史研究では、八戸市域を対象とした調査・研究を、現地の八戸市立是川縄文館との密接な連携のもとすすめている。

本年度の研究メンバー（学内研究者および学外共同研究者）は以下の通りとなる。なお、構想調書提出後の異動に伴い研究体制の見直しをおこなった結果、若干名メンバーを変更した。

〈総括・研究代表〉 田口洋美（芸術学部歴史遺産学科教授・東文研所長）

〈考古班〉 北野博司（芸術学部歴史遺産学科教授）

長井謙治（芸術学部歴史遺産学科専任講師・東文研研究員）

安斎正人（東文研元教授）

佐藤宏之（東京大学大学院教授）

福田正宏（九州大学埋蔵文化財調査室）

小林圭一（山形県埋蔵文化財センター）

〈歴史班〉 竹原万雄（芸術学部歴史遺産学科専任講師・東文研研究員）

中村只吾（東文研専任講師）

入間田宣夫（一関市博物館館長）

菊池勇夫（宮城学院女子大学教授）

高橋美貴（東京農工大学准教授）

村上一馬（東北歴史博物館）

佐藤健治（福島県立医科大学非常勤講師）

〈民俗・人類班〉 田口洋美

謝 黎（芸術学部歴史遺産学科准教授・東文研研究員）

蛭原一平（東文研専任講師）
 森本 孝（あるくみるきく研究所）
 川島秀一（東北大学災害科学国際研究所教授）
 鈴木 清（民俗建築研究所）
 佐々木史郎（国立民族学博物館教授）
 思 沁夫（大阪大学准教授）
 高橋満彦（富山大学准教授）
 阿部朋恒（首都大学東京大学院博士後期課程）

〈環境デザイン班〉 三浦秀一（デザイン工学部建築・環境デザイン学科准教授）
 寺田徹（東京大学大学院特任講師）

(2) 内容の概要

本研究は、1年目から3年目までを基礎研究期間、4・5年目を応用研究期間として進めてきた。

基礎研究期間には、考古学、歴史学、民俗・人類学の3班に分かれ、国内外の数集落を対象に歴史社会研究を実施した。具体的には、時空間変移という視点から先史時代を主対象とし自然環境を軸に人類史規模での集落変遷を考究する通時的な動態把握としての「環境史研究」と、中世以降現代までを主対象に、自然と人為という視点からの経済・政治的環境をも重視した集落動態を追究する共時的時空間を意識した「地域比較研究」という二つの研究テーマを設定した。そして前者を考古班が、後者を歴史班、民俗・人類班が主に担当することとした。ただし、歴史班と民俗・人類班での研究会開催や合同調査の実施など適宜、班を横断した共同研究も行ってきた。

さらに、これらの学術的研究に加え「地域資源活用研究」として、地域再生の担い手育成や、地域づくりへの学術成果の活用方法を探る実践的研究も同時並行的に進めてきた。そこでは、生活誌など地域の方々の記憶やそれを刻んだ古写真、戦前の絵はがきなどを地域文化資源と位置づけ、それらを用いたブックレット（地域民俗誌）の作成やアーカイブスHPの公開などを通し地域づくりに役立つ資料媒体の創出を目指す。また、その活動は環境史研究や地域比較研究とも連動しており、調査（資料収集）や編集・整理作業へPD・RAや学生にも積極的参画を促し、地域の諸課題解決に向け主体的に取り組み、地域再生の牽引者となってゆく若い人材の育成（「若者たちの東北」と題した学科教育との連携を図る動き）を図っている。

なお、当初は地域比較研究、環境史研究、地域資源活用研究を、上述した3班の連携的な活動単位（ユニット）として設定していたが、実際の活動面で煩雑さが生じたため、活動単位は班のみとし、上記の3区分はそれぞれ研究テーマの区分に置換した。

4年目に当たる本年度以降の応用研究期間では、適宜、補足調査を実施しこれまでの基礎研究期間に取り組んできた各研究の成果をまとめてゆく。人材育成という点でとくに継続した長期的活動が不可欠である「地域資源活用研究」に関しても、調査（資料収集）を継続実施し、間断なく成果発信に努める。同時に、班を横断した共同研究も進め、議論の相互連関を図る。その上で、都市計画や農村計画、景観学といった工学系環境デザイン分野の研究者や、集落に付随する様々な権利関係を扱う法学研究者との相互議論と協働のなかで現代の時代的状況下での新たな共同体、コミュニティ創出のための理念を見出したい。